

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム (2003.12) 4巻1号:67-68.

【学会の動向】第43回日本母性学会報告記

千石一雄

学界の動向

第43回日本母性衛生学会報告記

千石 一雄*

平成14年9月5日、6日の両日、旭川市民文化会館、旭川グランドホテルを会場として第43回日本母性衛生学会を石川教授を会長として開催させていただいた。本学会（母性衛生学会）は、すべての女性の健康を守り、母性を健全に発達させ、母性機能を円滑に遂行するために、母性衛生に関する基礎的・臨床的研究の発展を目的の一つとしています。全国の産婦人科医師、助産師、看護師また看護学校講師や助産師学生が周産期医療および周産期管理・看護、また、思春期・更年期疾患の治療や看護、性行動、ドメスティックバイオレンスなど幅広く女性のリプロダクティブヘルス、リプロダクティブライツに関する内容に関し発表し、意見交換を行う場であります。したがって、参加者の大部分が助産師、看護師などの女性が占めており、通常行われる産婦人科の学会とは少しばかり趣が異なっておりました。プログラムの編成、座長の選任にあたって不明な点が多く、多くの方々より御助言をいただきました。とくに、準備委員会の委員をお願いしました本学看護学科の野村教授、伊藤講師、旭川看護学院の須藤副院長、さらには北海道看護短期大学、天使大学、札幌医大看護学科の先生方のなみかたならぬ御協力をいただき、ようやくプログラムの編成ができましたことに感謝いたします。

学会第一日目は6つの教育講演、理事長講演、会長講演、特別講演とシンポジウム、市民公開講座、第2日目は414題の一般講演とシンポジウム1題を行いました。

教育講演「更年期と痴呆」は京都府立大学の本庄教授をお願いし、ホルモン補充療法によるアルツハイマー病の予防などホルモン補充療法の利点に関し解説的なお話をいただいた。北海道大学周産期の水上教授

には妊娠中毒症の重症型の一つであるHELLP症候群の診断、予防法に関する講演、近畿大学産婦人科の星合教授からは「子宮内膜症と母性」と題し、生殖年齢女性に多く認められる子宮内膜症と月経痛、不妊との関連から解説をいただいた。天使大学学長の近藤先生は「助産師業務のあり方」に関し、日本と諸外国の比較を通じて、助産師の行動と責任、それを踏まえた助産師教育、看護教育のあり方にまで言及された。横浜市立大学平原教授はヒトの遺伝子が次々と明らかになって行く現状から出生前の遺伝子診断又遺伝カウンセリングの重要性、それを担うべき医師、看護師、心理職、社会福祉職などのすべてを包括した遺伝カウンセラー制度を確立すべきであることを強調された。教育講演の最後として厚生労働省母子保健課長の谷口氏に少子高齢化の対応策として提言されている「健やか親子21」（21世紀初頭の母子保険の国民運動）の解説をお願いし、思春期保健対策強化と健康教育の推進、妊娠・出産に関する安全性と快適さの確保と不妊支援、小児保健医療水準の維持・向上させるための環境整備、子供の心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減に関する厚生労働省としての基本理念に関し解説いただいた。特別講演は登山家・医師として著明な今井通子先生に「母性と環境」と題した講演をお願いした。近年の地球レベルでの自然環境・社会環境の悪化から見た女性のリプロダクティブヘルス、ライツをいかにして守るかという観点から内分泌攪乱化学物質、ドメスティックバイオレンスなど幅広い問題に関しユーモアとウィットにとんだ話が展開され、会場も大いに湧く講演であった。会長講演は「北の国からのメッセージ-母と子に優しい環境を-」と題し化学物質とくにダイオキシンと子宮内膜症との関連、シックハウス症

* 旭川医科大学産婦人科

候群の対策として旭川市とNPO化学物質過敏症支援センター、旭川医大などが共同研究を行っている転地療養の有用性に関する話題が提供された。

シンポジウムには「不妊治療と周産期」、「正常分娩について」、「周産期医療とIT」、「これからの助産師教育のあり方」を取り上げさせていただいた。「不妊治療と周産期」では、不妊治療による多胎妊娠の発生とその管理、不妊治療中の患者の精神的ケア、不妊治療により出生した新生児の問題点に関し活発な意見交換がなされ、現在の不妊治療の問題点の一つが浮き彫りにされたように感じられた。「正常分娩について」では、正常分娩というのは本当に何を言うのかと言った原点にかえり、母体の年齢、分娩誘発の可否、無痛分娩の有用性、WHOから提言されている正常分娩のケアに対する指針（WHO 21箇条）に関し、産婦人科医師および助産師の立場から活発な議論が行われた。その中でも分娩に対する若手医師の教育に関してパラメディカルの立場から多くの疑問点、改善すべき意見が出されていたのが印象的であった。「周産期医療とIT」では北海道、東北における遠隔医療の実践、香川県における地域の医療ネットワークを用いた妊産婦ケア支援システム、電子カルテと産科データベースの確立に関する現状が報告され、今後、双方向性の在宅診療支援システムの確立をどのように目指して行くかに関し議論が行われた。「助産師教育のあり方」では専門学校、短大助産学専攻科、4年制看護系大学の立場の違い、諸外国との比較、多様な展開が予想される21世紀の助産師像を想定し、教育をいかに考えるべきかなどの提案がなされた。今回は結論を導き出すものではなく各立場の意見が紹介されたと同時に、今後、解決すべく議論をすすめて行く方向性が示唆されたのではないかと印象を得た。

本学会は母性衛生の社会への啓蒙を主要な目的の一つとしていることから、市民を対象とした公開講座「ドメスティックバイオレンス（DV）」を企画させていただいた。近年社会問題化されているDVを多角的観点から検討するため、NPO法人女のスペース・おん、報道関係者、北海道庁、警察各々の立場からDVの現状、防止策に対し発表いただいた。DVサポートの現場から女性の専門外来、女性のための総合病院の設立を望む意見、カウンセリングによる精神的ケアの早期の確立、北海道における民間シェルターの活動状況そ

れに対する行政の取り組み、警察におけるDVの取り組みの状況、問題点などが詳細に紹介され、活発な議論が展開された。

第一日目の学会終了後、懇親会が和やかに行われ、新鮮かつ汚染の少ない北海道の食材は参加者に好評であったように感じられた。

第2日目は、一般講演414題の演題を1日でこなさなければならないことより会場を10会場設けたためか、いろいろ不都合も生じ、関係各位に御迷惑をおかけしたが、なんとか大過なく終了した。1日はさんで、9月8日には第22回産婦人科漢方研究会を同様に旭川グランドホテルで主催したため、学会終了後もほっとすることもできない状態であった。

今年の旭川は冷夏で心配したが、幸い、学会期間中は天候に恵まれ参加した会員方々から「北海道はいいですね」と言う言葉をたびたびいただき、産婦人科漢方研究会をなんとか終えることができた時、医局員一同胸をなで下ろしたことも記憶に新しい。

最後に、本学会のシンポジストを御快諾いただいた麻酔蘇生科岩崎教授、また、御支援いただいた旭川市医師会、旭川産婦人科医会の会員各位にあらためて謝意を表します。